



がんばっぺ! 気仙沼



がんばっぺ
気仙沼
応援団

発行日 2011年9月20日
第1巻 第3号
発行 共生社会東日本地震被災者救援・支援の会

気仙沼から高校生来阪、観光や交流

大阪府立つばさ高校の関係者が設立した「がんばろう! つばさネットワーク」は、共生社会東日本地震被災者救援・支援の会の協力を受けて、2011年5月に気仙沼で被災地支援活動で交流した、気仙沼高校の生徒11名、教員2名を8月3日から5日、大阪に招待して、交流を行いました。

気仙沼からの参加者は、大阪に到着後、通天閣を見学(写真下)。そして、つばさ高校での交流会の後に、同高の生徒らの家庭でのホームステイに向かいました。ホテル



上)など、教育的なプログラムもありました。そして、奈良観光(写真下)を最後に3日間の来阪を締めくくりました。(2ページに関連記事)



ではなく、ホームステイにしたことで、アットホームな体験をしてもらえたと思います。

来阪2日目には、大阪市立大学の文化交流センターで関西の進学情報の説明を受ける(写真



被災地復興支援事業、本格始動へ

共生社会東日本地震被災者救援・支援の会は、これまで被災者への義捐金や義捐物資の提供、ボランティア活動の実施などの活動を中心に取り組んできました。こうした活動は今後も継続していきますが、被災地の経済復興につながる事業を本格的に開始する予定です。

第一弾として、9月22日から26日、「復興支援ツアー」を実施します。これは、軽めのボランティアや被災者からのお話を聞く

といった教育的プログラムに加えて、観光や飲食を通じて被災地に「お金を落とす」ことを目的にしたものです。

第二弾では、気仙沼で経済復興に向けて活動している方をお呼びします。関西の人々と交流をしたり、シンポジウムで復興に向けた現状と課題などについてお話いただくことです。次号のニューズレターで、こうした活動についてお知らせする予定です。



【最東】141° 40' 31"
【最西】141° 23' 55"
【最南】38° 44' 23"
【最北】39° 00' 10"

気仙沼市について

- 人口:7万3000人余り
- 特産品:海産物が主で、フカヒレ、カツオ、カキ、サンマ、マンボウ、マグロ、アワビ、ウニなど
- 地酒:男山、角星
- 観光スポット:気仙沼大島、徳仙丈山つつじ
- 市の花と鳥:ヤマツツジ、ウミネコ(写真上)

目次:

「震災と女性」のシンポジウム開催	2
気仙沼高校の生徒・教員、来阪	2
高校生ボランティア派遣	3
バスで14時間、ボランティア活動や交流	3
メーリングリスト参加のお願い	4
ボラバス、大島でガレキ仕分け作業	4
編集後記	4

シンポジウム「震災と女性」の開催

2011年7月25日（月）午後6時半から大阪駅前第2ビル6階の大阪市立大学文化交流センターで、NPO法人イコールネット仙台の代表理事で、中央防災会議「地方都市等における地震防災のあり方に関する専門調査会」委員の宗片恵美子さん（写真）を招いて、被災時における女性のニーズや支援にける課題などについて考えるシンポジウムを開催しました。

宗方さんはまず、東日本大震災の後、避難所生活を送る女性たちに困りごとや要望の聞き取りを行ったそうです。その結果、洗濯も自由でできない状況があると聞き、洗濯物を集め、洗って返却するボランティア活動を開始されました。

の視点を
女性支援
イコール
ネット仙台



また、避難所では、更衣室や仕切りがなく、布団の中で着替えをせざるを得ない女性が少なくありませんでした。このため、仕切りのかさ上げなどを働きかけたそうです。物資については、裁縫セットや基礎化粧品、下着などが不足していたということでした。

こうした問題の改善が進みにくい理由のひとつに、避難所の運営責任者の大半が男性で、女性のニーズに気がつかないことがあげられます。このため、多くの被災女性は、あきらめと我慢の日々をすごしていたと思われます。こうした状況を変えていくには、避難所の運営に女性が関わっていくようにする必要があると訴えておられました。

気仙沼高校の生徒とつばさ高校の生徒が交流

「がんばろう！つばさネットワーク」（以下、ネットワーク）は、2011年5月、共生社会東日本被災者救援・支援の会（以下、支援の会）とともに、気仙沼の被災地で支援活動を行いました。そこで交流した、気仙沼高校の生徒11名、教員2名を8月3日から5日に大阪に招待し、交流しました。

初日の8月3日には、ネットワークと支援の会の代表は、気仙沼からのゲストを箕面市で迎え、まず温泉に入りました。その後、大阪市内へ移動し、通天閣を見学。新世界で串カツを食べた後、北摂つばさ高校に移動、歓迎セレモニーや生徒会、ダンス部、フォークソング部によるアトラクションでもてなしました。また、全校生徒で折った千羽鶴をプレゼントしました。

2日目の朝、送迎担当のつばさ高校の生徒が分担して迎えに行き、北摂つばさ高校にゲストとホストが集合しました。その後、バスで大阪城の見学。さらに大阪駅前第2ビルの大阪市立大学の文化交流センターへ移動し、関西の進学情報の説明を受けました。午後には、茨木市へ移動して、被災地支援活動報告会に参加されました。北摂つばさ高校の生徒の発表と気仙沼高校の生徒、先生の発表に会場を埋め尽くした130人の参加者は聞き入っていました。

最終日の8月5日には、早朝から送迎リーダーがホスト宅を回って荷物を回収、8時にはゲストとホスト生徒が北摂つばさ高校に集合しました。生徒どうし名残惜しく、なかなか出発できず、出発したのは9時になりました。奈良に移動、法隆寺を見学し、健康ランドに移動。健康ラ

ンドで入浴・夕食などの休息をとった後、20時過ぎに奈良を出発し、気仙沼へ戻りました。

気仙沼高校の生徒・教員の受け入れの中心となったひとり、藤井伸二さんは、「3日間を通して、高校生同士が交流を図ることで、被災地の復興に少しでも貢献できたのではないかと、思われます。まず、気仙沼で被災した高校生が『家』でくつろぐことで気分転換し、また被災した高校生が自分の体験を話すことで少しでも癒せてもらったのではないかと述べています。

例えば、津波で自宅が流され、今も高校近くの中学校で避難所生活をしている気仙沼高校の男子生徒は、学校生活は平常通りに戻っており、生活の立て直しを図ろうとしているところだそうです。そんな中で、大阪に来て、避難所ではなく、久しぶりに「家」で寝ることになり「ホストファミリーに小学生の3兄弟がいて、ワンパクで相手をするのが大変だったけど、すごく楽しかった」と笑顔で話してくれていたということでした。

なお、交流の経費の一部をねん出するために、つばさ高校の2年「アジアの文化」、3年「時事問題」の受講生130名は、分担して7月に4日間にわたり、阪急茨木駅前街頭募金をしました。また、気仙沼からのゲストの宿泊は、ホームステイでした。このホームステイのホストファミリーは、つばさ高校付近の玉島地区、水尾地区の連合自治会の方々によって確保されたということです。このように、高校生や地域住民も含めたさまざまな方々や団体の協力の結果、成立した事業ということができるといえるでしょう。



高校生ボランティア派遣

1日目:8月16日(火)

午後4時45分にJP大阪駅西側ガード下に集合。午後5時、保護者の皆さんの見送りを受けながら出発しました。バスの中では皆さん元気で、14時間後に気仙沼へ入りました。



(写真) 出発前のバス付近の様子

2日目:8月17日(水)

気仙沼市内から車で30分から程のところにある唐桑町で、気仙沼復興協会事務局の

千葉貴弘さんから被災地の状況説明とボランティア活動についてのガイダンスを受けた後で、活動を開始しました。

この日、参加したのは、気仙沼市唐桑体育館で行われている「思い出は流れない 写真救済プロジェクト」でした。津波で流された写真を綺麗に復元する作業のお手伝いです。地元ボランティアの方々と話しながら、皆、真剣そのもので、作業に取り組みました。



(写真) 復元作業に取り組む高校生たち



＜大阪からの参加者＞

高校生（大阪府立三国ヶ丘、春日丘、箕面、柴島、私立常翔、千里国際、寝屋川フリースクール、岡山倉敷高校、計8校の生徒）14名 引率4名、学関係等一般ボランティア8名、合計26名
現地合流参加：さいたま市高校生3名・引率2名

総勢64人！

＜気仙沼の参加者＞

宮城県立気仙沼高校の生徒11名、引率3名、宮城県立西高校生徒10名、引率1名、気仙沼市立鹿折小学校校長および教諭5名
現地サポート：気仙沼西高校PTA会長、プロジェクト気仙沼サポート2名等計3名

バスに揺られて14時間、ボランティア活動や交流！

3日目 8月18日(木)

午前8時、八瀬森の学校出発。八瀬の森の学校は、大正時代に建てられた旧校舎を地域の方が活用、そば打ち体験や民泊などを行っています。今回の宿泊は、3～4人のグループで泊まりました。学校からボランティアセンターへ行き、大阪ボランティア協会の岡本こずえさんからボランティアセンターの役割や仕事の内容の説明を受けました。



午前9時、気仙沼市立鹿折小学校到着。鹿折小学校は平成22年11月末に完成した新校舎が3月11日の津波により被災しました。全校児童356人中、3名が亡くなり2名の児童が行方不明です。現地高校生と支援ボランティアの大阪の高校生・さいたま市の高校生協働で校舎の壁を清掃（写真上）。大阪からのメンバー14名と気仙沼高校生11名・気仙沼西高校生10名・さいた



ま市から参加の高校生3名と引率者現地サポーターなど60人余りが参加しました。

鹿折小学校校舎の壁面清掃実施後、大阪と気仙沼の高校生の交流会を開催（写真左）し

ました。

その後、市内の被災状況を視察。大きな船が陸に打ち上げられ、道路をふさいでいる、テレビなどでよく放映されているシーンも目のあたりにしました。

午後4時には、八瀬の森の学校に戻りました。そして、民泊先で入浴などをした後、八瀬森の学校でそば作り（写真下）を体験。作ったおそばをを皆で夕食としていただいて、午後6時に大阪に向かいました。

再び14時間に及ぶバスの旅を経て、19日(金)午前8時、JR大阪駅西側ガード下に無事到着、解散しました。



〒530-0001
大阪市北区梅田1-1-2-600
大阪駅前第2ビル6階
大阪市立大学大学院創造都市研究科
都市共生社会研究分野
柏木宏研究室気付
E-mail: kashiwagi@gssc.osaka-cu.ac.jp

ご寄付のお願い

振り込み先:

共生社会東日本地震被災者救援・支援の会

▽ゆうちょ銀行からの振り込み
ゆうちょ銀行
記号14180 番号54656361

▽他銀行からゆうちょ銀行への振り込み
店名 四一八(ヨンイチハチ)店番418
普通貯金 口座番号5465636

共生社会東日本地震 被災者救援・支援の会とは？

3月11日の東日本大震災発生直後、大阪市立大学大学院創造都市研究科都市共生社会研究分野の教員・院生・修了生を中心に設立された任意団体です。宮城県気仙沼周辺地域の被災者への救援と地域の復興活動を支援するために、大阪でNPO、行政、企業と連携しながら活動を進めています。

共生社会東日本地震被災者救援・支援の会が8月16日にボランティアバスを派遣した時期に合わせて、気仙沼を訪問した。5月の連休に続いて、2回目だ。宿泊先は、大島でガレキの仕分け作業をしたボランティアが宿泊した旅館、明海荘だった。

大島は、気仙沼の沖合いの島である。当然、歩いて行くわけにはいかない。フェリーに乗る。乗り場に着いたとき、フェリーがでたばかりだった。このため、しばらく港付近を歩いてみた。国の有形文化財に指定されている地元の酒造メーカー、男山の本店の建物も、1階が崩れ落ち、津波の激しさを物語っていた。

ふと気づくと、少し前に歩いた道に水が溢れている。地震による地盤沈下に満ち潮が重なり、道路が冠水して

…第2回ボラバス、大島でがれき仕分け作業…

8月16日から19日までのボランティアバスは、高校生を中心にしたもの(2ページに関連記事)でしたが、大学院生や社会人も参加しました。これらの人々は、高校生とは別メニューが用意され、気仙沼の沖合いにある大島でガレキの仕分け作業などに従事しました。

宿泊先は、大島の旅館、明海荘。島の高台に位置していますが、津波はわずか5メートル下まで来たそうです。上の写真は、明海荘の前で記念撮影した参加者の皆さんです。



大島でのボランティアは、ガレキの山から木材を仕分ける作業(写真左)でした。ガレキの山というのは、各地から集められてきたガレキを集めたところをいいます。このガレキの山には、木材、金属類、プラスチックなど、さまざまなものがあります。それをリサイクルするためには、同様なものに仕分ける作業が必要になります。被災して臨時職員として行政に雇用された人もいますが、膨大な量なので、ボラン



ティアの手が求められるのです。

この他、大島の仮設住宅の集会所で、仮設住宅の住民の方々に、音楽イベント(写真右)を行いました。参加者の一人の演奏に対して、住民の方々から大島音頭が披露されるなど和やかな雰囲気のひとつを過ごすことができました。



☆メーリングリスト参加のご案内☆

被災者支援の会では、メーリングリストを作成して、情報の伝達と共有化を図っています。どなたでもお入りいただけますので、ぜひご参加ください。参加申し込みは、以下まで。

SHINKA Junko <shin_casshern@hotmail.com>

編集後記

きたのだ。乗り場の近くには、酒屋さんがオープンしていた。この酒屋さんから女の子がでてきた。長靴姿の手に釣竿をもって、歩き回りながら、魚がかかるのを待っているが、かからない。のどかな風景というか、大変な災害に遭遇しても、楽しむすべを見出していく人々の力強さを見たような気がした。

大島に着いた翌日、ガレキの仕分け現場付近に行くと、島の山頂まで続くロープウェイが倒壊していた。これでは、観光客も呼ぶのは難しい。観光協会の人に、大阪の放置自転車をもらい受け、レンタサイクル用に貸し出したらどうかというと、規制があつてできないという。地震の被害に立ち向かおうとしても、人間の社会が妨げる。今の日本社会の問題の一端を見た思いをした。(HK)